

## 「デジタルスキル標準」の あらまし

株式会社QualityCube

経済産業省と独立行政法人情報処理推進機構（IPA）は、企業・組織のDX推進を人材のスキル面から支援するため、指針である「デジタルスキル標準（DSS）」を取りまとめました。あらましと活用  
のポイントを解説します。

2

022年12月に、経済産業省と独立行政法人情報処理

推進機構（IPA）が「デジタルスキル標準」を公開しました。「デジタルスキル標準」は次の2つの標準で構成されています。

【DXリテラシー標準】……経営層を含んだすべてのビジネスパーソンが身につけるべき能力・スキルを定義

【DX推進スキル標準】……DXを推進する人材類型の役割や、習得すべきスキルを定義

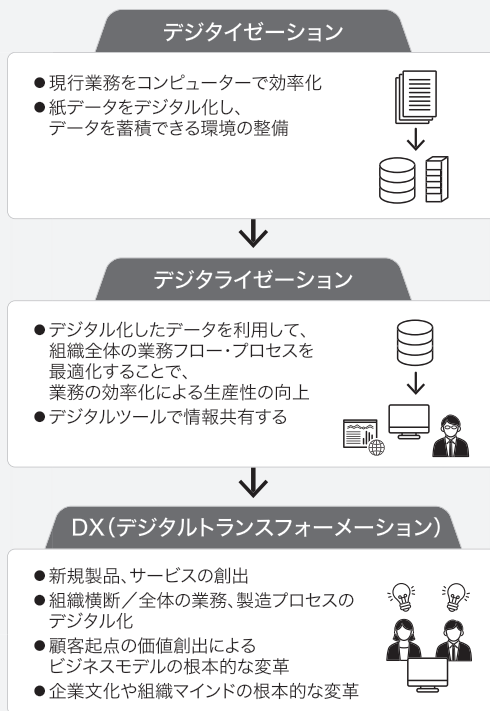
本稿では、「DXリテラシー標準」を構成する項目の概要と、項目間の関連性を説明し、さらに活用のポイントを示します。

### DX（デジタルトランス フォーメーション）とは？

DXとは、データとデジタル技術を用いて従来の業務フローを見直し、効率化・最適化を目指す取り組みのことです。2004年に、当時スウェーデンのウメオ大学教授だったエリック・ストルターマンによって提唱されたのが起源といわれています。

DXの実現に至るまでには、「デ

図表1 デジタル化の3段階



出典 IPA「DX白書2023」

ジタイゼーション→デジタライゼーション→DX（デジタルトランスフォーメーション）の3段階を必要とするとされています（図表1）。

DXというキーワードが人口に膾炙するようになって久しいなか、大手企業では続々とDXへの取り組みが進められています。

しかし多くの中小企業では、デジタライゼーションからDXへの一歩が踏み出せていないのが実情ではないでしょうか。現在、自社がどの段階にあるかを、一度確認されることをお勧めします。

いまだ第2段階のデジタライゼ

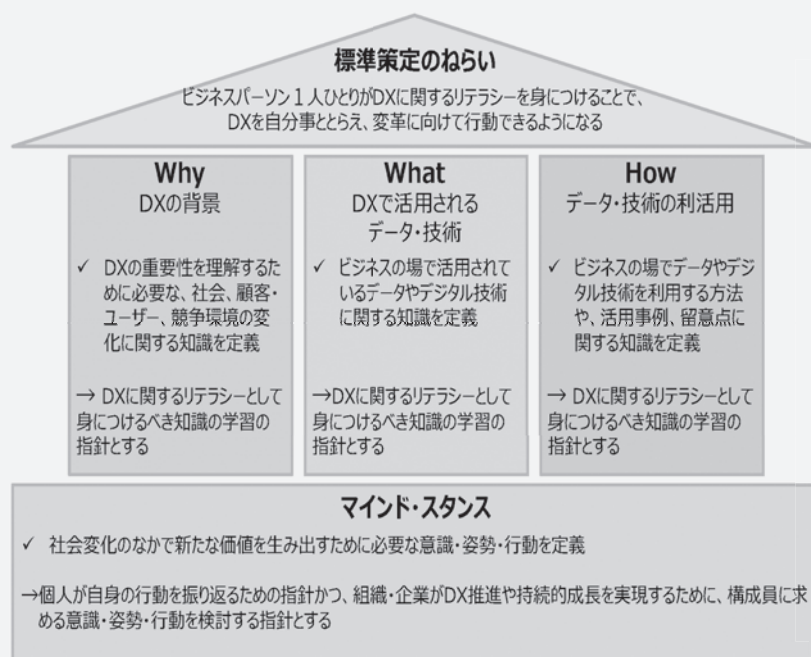
ーションにさえ進んでいないのであれば、早々に対策を打つ必要があります。もし、「いまのままでもやっていける」と楽観視しているならば、遠からず時流に乗り遅れてしまうでしょう。

### 「デジタルスキル標準」が 取りまとめられた背景

「第四次産業革命」は、我々を取り巻くあらゆる物事に影響を及ぼしています。

第四次産業革命とは、AI・IoT・ビッグデータ・ロボットの

図表2 DXリテラシー標準の全体像



出典 経済産業省 IPA「デジタルスキル標準 ver1.0」

さらなる活用など、近年急速に進んでいる技術革新による社会の変化を意味します。第四次産業革命で生まれた革新技術を既存、あるいは新規のあらゆる事業や日常に取り込むことが、社会の変化に適応していくうえで最善の解決策と

なります。  
まさにシンギュラリティ（技術的特異点）を迎えようとする昨今において、企業が他との差別化を図り、情報の優位性を確立するためには、DXの実現が不可欠といっても過言ではありません。

しかしながら多くの中小企業では、DXへ取り組むことの重要性は認識しているものの、実態としては大幅に出遅れてしまっていると言わざるを得ません。その要因として、DXの素養や人材の不足が挙げられます。

こうした状況から、「デジタル田園都市国家構想基本方針」（2022年6月7日閣議決定）において、「2022年末に、データやデジタル技術の利活用を通じ、DXを推進する人材に係るスキル標準を策定する」ことが示され、DX推進における人材の重要性を踏まえ、個人の学習や企業の人材確保・育成の指針となる「デジタルスキル標準」が取りまとめられたのです。

## 「DXリテラシー標準」の概要

「リテラシー」とは「適切に使いこなす能力」という意味です。「DXリテラシー」とは、すなわち「DXの特徴を理解しながら、DXを利用・活用する能力」を意味します。したがって、「DXリテラシー標準」は、「すべてのビ

ジネスパーソンが身につけるべき能力・スキルを定義しているもの」といえます。

IPAの資料では、「DXリテラシー標準」を図表2および図表3で示しています。

図表2の「全体像」については、なんとなく理解できるものの、図表3の「項目一覧」では、項目が「Why」「What」「How」「マインド・スタンス」という4つのグループで示されており、このグループ間にどのような関連性があるのか、実にわかりにくい印象を受けてしまいます。

筆者自身も、この項目一覧をどのように解釈すべきか悩みましたが、結果的に辿り着いたのが、49頁「図表4を使って説明する「DXリテラシー標準」の解釈です。

DXリテラシー標準は、大きく4つのエリアに区分されているといえます。図表4と併せて解説します。

図表4のエリア1（DXリテラシー標準の「Why」）では我々を取り巻く環境の変化が取り上げられています。

例示すると、図表4①（以下丸数字は図表4の数字を指します）の社会の変化として、

- 日本と海外におけるDXの取組  
みの差
- 第四次産業革命
- ②の顧客価値の変化として、  
デジタルサービスの普及・浸透・  
定着化
- ③の競争環境の変化として、  
インターネットを前提とした商  
品の販売
- サービスの普及・浸透・定着  
などが挙げられるでしょう。
- つまり、DXリテラシー標準を  
理解すべき理由(Why)は、  
「我々を取り巻く環境の変化への  
対応力を高めるため」ということ  
になります。
- 図表4のエリア2(DXリテラ  
シー標準の「マインド・スタン  
ス」では、環境の変化に対する④  
のマインド・スタンス(心構え)  
を取り上げ、「抵抗」ではなく「適  
応」するための心構え・考え方が  
説かれています。
- DXリテラシー標準では、  
■ 同業他社や異業種とのコラボレ  
ーション
- 自社の論理より顧客・ユーザー  
の立場に立つて考える
- 前例や常識に囚われず発想する
- 柔軟に意思決定する
- 経験と勘だけではなく事実に基づ

- づいて判断する  
などが挙げられています。
- 頑なに前例を踏襲することによ  
りだわたり、そんなはずはない  
などという固定観念に囚われたり  
したまましていると、DXによる変  
化に取り残されてしまいかねな  
い、ということです。
- 図表4のエリア3(DXリテラ  
シー標準の「What」)につい  
ては後述します。
- 図表4のエリア4(DXリテラ  
シー標準の「How」)では、D  
Xの活用法と並び、  
⑪ セキュリティ  
⑫ モラル  
⑬ コンプライアンス  
の3つが留意点として挙げられて  
います。
- いまさらと思う人もいるかもしれ  
ませんが、DXではインターネ  
ットが必須の存在であり、セキュ  
リティ・リスクを念頭に置いて考  
える必要があります。主なセキュ  
リティ・リスクとして、  
■ 不正アクセス  
■ 社外秘情報の漏えい  
■ 個人情報流出する危険性  
などが挙げられます。
- インターネット活用に際して  
は、正しく利用するための「モラ

図表3 DXリテラシー標準の項目一覧

#### DXリテラシー標準策定のねらい

ビジネスパーソン1人ひとりがDXに関するリテラシーを身につけることで、DXを自分事ととらえ、変革に向けて行動できるようになる

Why DXの背景	What DXで活用されるデータ・技術		How データ・技術の利活用	
社会の変化	データ	社会におけるデータ	活用事例・ 利用方法	データ・デジタル技術の活用事例
顧客価値の変化		データを読む・説明する		ツール利用
競争環境の変化		データを扱う	留意点	セキュリティ
	デジタル 技術	データによって判断する		モラル
		AI		コンプライアンス
		クラウド		
		ハードウェア・ソフトウェア		
		ネットワーク		

#### マインド・スタンス

デザイン思考/アジャイルな働き方

新たな価値を生み出す  
基礎としてのマインド・スタンス

顧客・ユーザーへの共感

常識にとらわれない発想

反復的なアプローチ

変化への適応

コラボレーション

柔軟な意思決定

事実に基づく判断



今後も継続的にDXの在り方の変化を捉え必要な改訂を行なう。

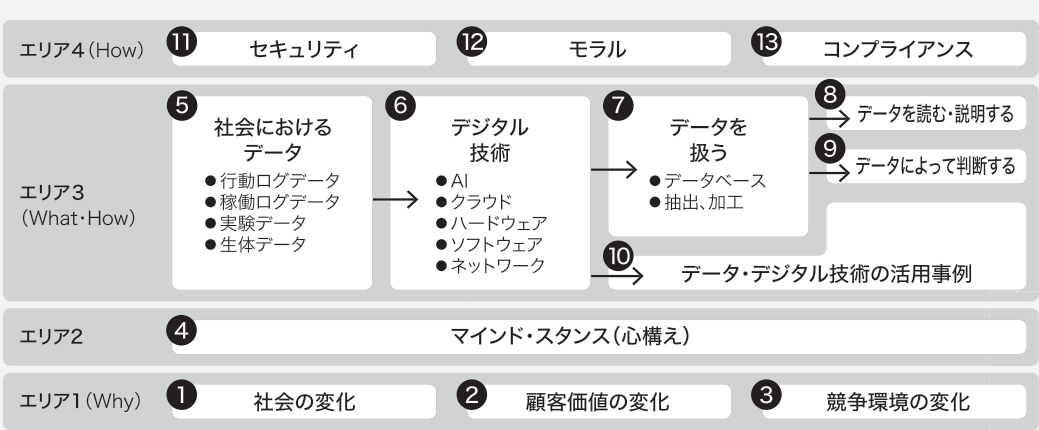
出典 経済産業省 IPA「デジタルスキル標準 ver1.0」

ル」もわきまえる必要があります。  
たとえば、出所不明な怪しい情報  
を拡散することは非常に危険であ  
り、刑事罰や損害賠償請求にまで

発展する恐れがあります。  
知的財産権や個人情報、そして  
諸外国でのデータ保護規制を順守  
することは、DX推進におけるコ



図表4 DXリテラシー標準の解釈



図表5 DXリテラシー標準の活用ポイント

社内におけるポジション	活用ポイント
経営者層を含むすべての社員	● 自社を取り巻く環境の変化(エリア1)を理解する ● DXに取り組む心構え(エリア2)を確認する ● インターネットの活用に必要なセキュリティ、モラル、コンプライアンス(エリア4)を遵守する
経営者・経営企画部門	● 自社がDXへ取り組むための環境を整備する ● 自社の取組みに関する方向性を検討し、方針を打ち出す ● 自社業務の効率化を促進するために、デジタル技術とデータ・デジタル技術の活用事例(エリア3)を参考にする
営業部門	● 自社の顔として、変化(エリア1)を理解する ● その変化とうまく付き合う術(エリア2)を身につける ● 入手できるデータを活用(エリア3)し、業務の効率化を図る
人事部門	● DX推進に必要な人材の条件を知るために、エリア3の知識を参考にする
製造・開発部門	● 業務改善および新分野へチャレンジするために、保有するデータを活用(エリア3)する
新入社員	● 担当する業務およびデジタルスキルを活用する場面における基礎知識(エリア3)を修得する

ンプライアンス対象です。  
モラル順守を個人の問題として  
片づけるのではなく、企業の責務

としてネットリテラシーを理解し  
ておかなければなりません。  
ここまでは、図表4のエリア3

(What・How)で解説する、  
データの利用・活用を読み解くた  
めの前提知識です。

DXリテラシー標準

(図表3)を見ると、  
Whatの構成要素  
は、データを扱う一連  
のプロセスになってお  
り、「How(利用法)」  
の要素も多分に含ん  
でいます。

「DXはビジネスモ  
デルの変革」だといわ  
れていますが、変革を  
実現させるためには  
「戦略」と「戦術」が  
不可欠であることを認  
識しておかなければな  
りません。

「戦略」とは企業が  
進むべき方向性やゴー  
ルを示す標となるもの  
で、「戦術」とは「戦  
略」を具体化していく  
ための方法論を指して  
います。

では、それらを確立  
するための根拠とは何  
でしょうか。それは  
「データ」に隠されて  
いるのです。DXは経

験と勘によって進めるものではな  
く、データに基づいて進めていく  
もの、と理解しておきましょう。

以上を踏まえると、図表4のエ

リア3(What・How)では、

⑤ 社会におけるデータで、収集  
するデータを明らかにする

⑥ デジタル技術で、データを収  
集するための基盤を説明

⑦ データの蓄積と蓄積したデー  
タを分析するための抽出と加工

⑧ データを読み、説明する

⑨ データによって判断する

⑩ データを収集する基盤や収  
集したデータの活用事例

という、データの利用法を説明し  
ています。

ここまで解説したように、図表  
3だけでは要を得なかった各項目  
が、図表4と照らし合わせるこ  
とで項目間の関連性がはつきりし  
てきます。「DXリテラシー標準」  
を読み進める際に、図表4に示  
した関連性を意識するのとしな  
いのは、理解度は大きく異  
なるでしょう。

また、「DXリテラシー標準」  
の活用ポイントは、企業内でのポ  
ジションによって変わってくるも  
のです。図表5にまとめましたの  
で参考にしてください。